



■ 2007年5月9日、きらく湯最後の灯り。

きらく湯よ、 ごちそうさまでした

岩田英作

二〇〇七年五月九日。僕は、きらく湯（喜楽湯）の湯ぶねの中にいた。

大正四年の創業以来、九十二年にわたって庶民に親しまれてきたきらく湯は、この日、その歴史に幕をおろした。きらく湯は、僕にとつても実に思い出深い銭湯である。松江市母衣町。今から二十年余り前、学生だった自分は、きらく湯から五十メートルと離れていないところで、ひとり暮らしをしていた。僕の住み家は長屋風情の、当時でも珍しいくらい安普請の建物で、畳は波うち、壁には奇妙なシミができて、もちろん風呂はなく、テレビも電話もなく、トイレは隣のひとり暮らしのおばあさんと共有で、夜中になるとおばあさんの鼾がまるで壁がないかのようにはっきりと聞こえてくる始末だっ

た。僕は大学の四年間、そこから下駄をつっかけて、毎日のようにきらく湯に通ったのである。

そのきらく湯がなくなると聞いて、僕は最後のお湯を浴びにかけつけた。男湯の入り口をあける。木製の更衣棚くたびれたマッサージチェア。壁掛けの扇風機。すべてが昔のままである。一瞬、自分だけが歳をとってしまったような錯覚におそわれる。

銭湯は湯ぶねが大きいだけではなく、天井もぐんと高い。銭湯の風呂場の壁面には、山だの湖だのがよく描かれている。きらく湯の場合は、壁も天井もライト・ブルーで統一されていて、余計な装飾はない。熱めのお湯につかりながら漫然と周囲を見渡すと、まるで青空のなかで風呂に入っているかのようだ。

さて、久しぶりのお湯につかりながら、僕には思い出さないではいられない人がいた。その昔、番台に座っていたおばあさんである。そのおばあさんの姿が、最後のこの日、番台にない。

広島時代の銭湯

ところで、僕は大学を卒業してから広島に出て、さらに五年ほど学生を続けた。広島でも相変わらずの銭湯通い、つまりは学生の九年間はそのまま銭湯の日々でもあったわけだ。僕が住



んでいたのは広島市内の吉島というところ。近くに日の出湯、ちよつと足を伸ばすと吉島湯があった。

吉島には広島刑務所がある。そのせいかどうか知らないが、刺青をした人を銭湯でよく見かけた。昇り童や観音菩薩が背中一面を覆って、それはそれを見ごたえがあった。おじいさんの中にも刺青をした人はいて、その背中の童も相応に皺がよって年老いて見えるのが、なんだかかわいくもあった。

日の出湯という名の銭湯は日本中にいくらかもあるが、現在、ネットで検索してみても、吉島の日の出湯はヒットしない。さいわい吉島湯は見つかったので電話を試してみた。受話器の向こ

うでか細い女性の声、聞けば八十一歳になられるという。おばあさんの話では、日の出湯は四、五年前にやめられたということだった。日の出湯のみならず吉島一帯の銭湯は軒並み暖簾をおろし、煙突から煙が出ているのは今では吉島湯だけだそう。

広島大学の移転で学生がこつそり抜け、かつての風呂なしアパートはマンションや駐車場へと変わっていった。そのうえ近くの宇品にはスーパー銭湯と呼ばれる大型の憩いの施設ができた。吉島湯は大正十五年の創業で、おばあさんで三代目。客は激減したが、存続を望む声も僅かながらあり、保健所からも続けるように要請されて、やめるにやめられないとのことだった。いまは番台に上がることも少なくなつたとおばあさん。お元気で、と電話を切った。

オロナミンCとおばあさん

きらく湯のおばあさんの話にもどる。広島での学生生活を終えて、僕はふたたび島根にもどることになった。いざ、五年ぶりのきらく湯へ。番台には、ああ懐かしい、おばあさんである。するとどうだろう。

「あなた、前に来ておられた学生さんじゃない」
おべた（びっくりした）。がいにお

べた（とてもびっくりした）。そうして、なんてうれしいことだろう。おばあさんは、僕のことをおぼえてくれていたのだ。一年や二年の昔ではない。風呂に入らずとも、もうばかばか、あったかい、である。

風呂からあがり、服を着ていると、「これをどうぞ」と、おばあさんはオロナミンCをくださった。

まいった。
おばあさんがもつと若ければ、あるいは僕がおじいさんであったなら、僕はおばあさんにきつと恋をしていたにちがいない。

それが一九九一年春のこと。それから十六年ぶりのきらく湯、すなわち五月九日となつて、ところが番台に、おばあさんの姿がないのである。しかし、番台には交代で座るから、自分が行ったときに、たまたまおばあさんの番ではないということも十分ありうる。僕は番台のおかみさんに、思い切つておばあさんのことを尋ねてみた。そうだったのか。おばあさんは、すでにこの世の人ではなかった。亡くなられて七、八年になるということだった。

僕が学生時代に住んでいたおんぼろ長屋は、今は駐車場になって跡形もない。きらく湯の横を流れる堀川も以前はこんなきれいでなくて、というよりすつごい汚くて、ネズミの死骸と



かが浮いたりしていたものだ。きらく湯に対面する高級志向のスーパーも、小さな普通のスーパーに過ぎなかった。変わっていく。いろんなことが。更衣室の壁には、オロナミンCを片手に微笑む丸メガネの大村崑ちゃん。あいかわらずメガネがずり落ちそうですよ。

オロナミンC。おばあさん。その接



点で、変わることなく僕の中にあるもの。

きらく湯を出ると、外はすっかり暗くなっていた。看板の「きらく湯」の文字が宵闇に照らし出される。あしたからは、この灯りがともることはない。僕はその灯りをしばらく眺めて、それから家路についた。

ご主人をたずねて

二〇〇七年八月二十日。僕は、きらく湯のご主人を訪ねた。

きらく湯の面した道路は、市内の中心部を城山から東へ貫いており、長い間もめにもめて、このたび拡張が決定。それにともない、きらく湯も立ち退きを余儀なくされた。

きらく湯とそれに隣接するご自宅は早晚解体されるというところで、ご主人の岩崎武彦さんと奥さんの美津子さんは、市内のマンションに仮住まいをされていた。ご主人はおばあさんのご子息、奥さんは五月九日に番台に座っておられたおかみさんその人である。

きらく湯はご主人の祖父が創業され、ご主人で三代目になる。ご主人が営業を継いで、か

れこれ五十年になるという。継いだ当時は松江にも三十軒ほどの銭湯があったが、きらく湯は四年前にとうとう松江で唯一の銭湯になった。

「あなたが入っておった頃は、芋の子を洗うようだったでしょう」

たしかに、自分が通っていた二十年前は、まだきらく湯はお客でにぎわっていた。体を洗うにも順番待ちをしていた覚えがある。一日百人くらいは入っていたそうだ。それが今では一日の利用者が三十人ほど。ちなみに大人一人の入浴料は三百五十円である。営業時間も午後三時から十一時までが四時から十一時までとなり、現在は五時から十時まで短縮された。

利用者の減少に加えて道路の拡張。二十五年にわたって風呂焚きの管理をされてきた女性も七十五歳を迎え、体力的に限界に近づいた。いろんなことが重なってこのたびの営業停止の決断。減ったとはいえ、日ごろのお風呂として日々利用される近隣の方もいた。

「あの方はお風呂をどうされているだろう、あの方はどうだろうと、今でもよく思います」

と、奥さんは気がかりな様子だった。

小錦のエピソード

こんなエピソードも聞かせていただ



いた。一九九八年のこと、大相撲の巡業が松江を訪れた際、力士のお風呂として利用されたのがきらく湯。時の横綱は貴乃花に曙、ふたりはさすがに別格で男湯を占有し、残る大関以下は女湯を利用していた。と、女湯にいた小錦は曙の誘いで男湯へ移動した。ここでご主人には大いなる疑問が生じた。男湯と女湯のあいだにはドアがある。移動するにはそのドアを通らなくてはならない。しかし、そのドアたるや、とても小錦が通り抜けることのできる大きさはない。

「たったこれほどの幅しかないよ。そこを小錦が……不思議だねえ。あなたも行って見てごらんさい」

ご主人の勧めにしたがって、僕は行ってみることにした。その時に撮った写真をご覧いただきたい。ドアは通常のものよりもひとまわり小さくて、あの巨漢の小錦がとても通れるとは思

えなかった。そのドアでないとするれば、ではどうやって……不思議は依然不思議のままである。

銭湯会議？

式亭三馬の『浮世風呂』は、その名の通り銭湯に集う江戸庶民の様子を活写したお話として有名である。近代に入って、たとえば夏目漱石の『我輩は猫である』や芥川龍之介の『戯作三昧』においても銭湯が描かれている。いずれの場合も、銭湯はたんに体を洗うところではなくて、市井に生きる者たちの情報交換の場、社交の場として重要な役割を果たしている。井戸端会議ならぬ銭湯会議である。



現代のきらく湯においても事情は同様だったようである。常連の利用者はそれぞれ利用する時間帯がほぼ決まっています、すると時間帯ごとに、自然発生的に同じ顔ぶれのグループができる。いつもの顔が見えないと、「○○さん、どうしたのかね」ということになる。久しぶりの顔に出会えば、「あら、元気だったかね」となる。そうしてお互い今日の出来事を話したりしながら、一日の疲れを癒す。それがほぼ毎日、しかも裸のつきあいとなれば、気心も通い合って不思議はない。

「ごちそうさま」

おふたりのきらく湯にまつわるお話からは、長年の仕事に対する思いが伝わってきて、こちらも時を忘れて聞き入った。

なかでも挨拶の話は興味深かった。銭湯を出るとき、お客はなんと言うか。これが、「ごちそうさまでした」なのである。そう言われて思い出した。自分もたしかに「ごちそうさまでした」と言っていた。この挨拶の仕方は全国的なものかどうか分らないが、広島でも自分はそう言っていたような気がする。

この挨拶はもちろん飲食店で使用するのが一般的であろう。しかし、いまどきは、その飲食店ですら、金を払っ

て無言で立ち去る客も多い。ところが、きらく湯に来るお客は、大人も子どもも口をそろえて「ごちそうさま」と、帰り際に言うという。九十二年のあいだ、きらく湯におくられた、数えきれない「ごちそうさま」。そのひとつひとつが、ご主人たちの仕事の支えでもあったのだろう。

銭湯すたれば人情も……

戦後を代表する詩人田村隆一は、市井を愛した彼らしく、

銭湯すたれば人情もすたる
銭湯を知らない子供たちに
集団生活のルールと
マナーを教えよ（以下略）
と、うたった。

現在、銭湯を知らないのは子どもに限るまい。

きらく湯の閉業によって、島根県でいわゆる公衆浴場として登録されている銭湯は、益田市のへにしき湯〈ただ一軒となった。そのにしき湯にしても、個人の経営では成り立たず、二〇〇四年より第三セクター方式の運営に切り替わった。

島根における銭湯文化



■きらく湯ご主人の岩崎武彦さんと奥さんの美津子さん。

は、いまや風前の灯である。それがそのまま「人情」の衰退につながることを祈りたい。

ではそろそろ失礼しようと玄関に向かうと、襖の向こうに仏壇が見えた。お願いして、手を合わせた。久しぶりですね、おばあさん。いいお湯、そしてオロナミンC、ごちそうさまでした。

（いわた・えいさく／日本近代文学）

街のおもしろ文化観察学 入門

その式

小澤智香子
村上万里

連載となった「街のおもしろ文化観察学入門」。今年は生活科学専攻の二年生四人と編集長の計五人で、松江の芋町おまちから堅町たてまちまでの商店街を中心に観察しながら歩きました。

六月三十日午前十時。なるべく涼しいうちに出かけようとなりましたが、今年の夏は例年より暑かったため、集まった時点ですでに汗が滲むほどでした。暑さしのぎのため喫茶MGで冷たいものでも飲もうと思いましたが、残念ながらこの日は休業の様子。このカツ丼がおいしいと聞いていたので食べてみたかったのですが、それはまた次の機会に。

「三度使用有」???

というわけで、まずは芋町のあたり



■出雲ビルの前を通りかかる街の観察隊。

から歩くことにしました。早速、好奇心をそえられる、ちよつと変わった一軒の店が目にとまりました。「三度使用有」という何やら不思議な掛札がぶら下がっています。

和田翠雲堂という書画材料店です。店内をのぞいてみて、まず目に入ったのがたくさんある筆です。細い筆、大きい筆、中には筆先が羽毛のものまで……。こんなにいろんな大きさの筆を一度にたくさん見ることなんてなかなかないので、皆とても興味津々。お邪魔してお話をうかがうことにしました。

このお店は明治三十三（一九〇〇）年の創業で、代々奥さんが店を経営しておられるそうで、現在は四代目。書画材料を取り扱う店ですが、以前は画家や書道家の注文に応じて筆を作っていました。

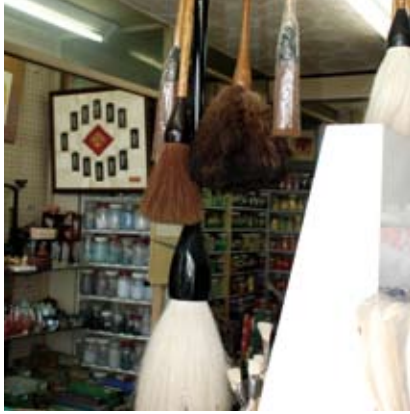


■和田翠雲堂の店先に吊された「三度使用有」の札。

もいたということ、特に二代目が作った筆は、かの有名な横山大観にも愛用されていたそうです。

ところで、玄関先に吊してある掛札ですが、「三度使」のいわれはいまいちはずりしないものの、要するに「運送屋さん、頼みたい荷物がありませんので、立ち寄ってください」という合図らしい。

店内には筆の他にも書道、日本画で使う道具がたくさん置いてあり、硯すずりや墨汁なども種類豊富で、デザインに凝ったものもありました。奥の棚にはカラフルな粉末の入ったビンがたくさん置いてあります。ビンの中身は日本画に使われる岩絵具で、原料が自然の鉱石か人工のもので値段に差があるようですが、スプーン一杯が数百円という結構高価なものです。岩絵具をよ



■和田翠雲堂。さまざまな筆が並ぶ。左下の写真が岩絵具。

く見ると同じ名前なのに微妙に色が違います。岩絵具は同じ名前でも番号で色が違うそうで、これだけたくさん置いてあるのにも納得しました。

呉服店の屋根裏に潜入!!

芋町を後にして西茶町、東茶町を通り末次本町へやってきました。末次本町では変わった建物を見つけました。かげやま呉服店という呉服屋さんの建

物です。一階の店舗は普通の呉服屋さんという感じなのですが、上を見上げると重々しい瓦葺屋根と二階の分厚い窓にびっくり。どうも昔の銀行の建物のようなです。

詳しいことを聞くため勇気を出してお店に入ると、何と社長さんが直々にお話してくださいるようになりました。この建物は元々は第三国立銀行という銀行の建物で、明治三十六年の建築だそうです。一階の屋根の鬼瓦には第三銀行のマークであった「三」の字が入っています。以前、雨漏りのため瓦の葺き替え工事が行われた際も、この鬼瓦だけは元のまま残したそうです。

この建物にそんな歴史があったのかと感慨深く思っていたら、社長さんが建物の屋根裏についてもお話してくださいました。屋根裏には上棟の棟札が残っているそうです。その写真や新聞記事を見せてもらっていたのですが、「実際に見ますか」と勧めてくださいる

ので、それではと遠慮なく見せていただくことにしました。二階の天井に取り付けられた入口から脚立きよたつを使って屋根裏に上がり、「上棟明治三十六年十一月二十二日」の文字を見ることができました。

た。きっと防火や盗難対策のためだと思われま。二階から商店街を見下ろすこともできました。なかなかこういうところまで見せていただく機会はないので、終始興奮気味。とても面白い話を聞き、体験させていただくことができました。

■かげやま呉服店。中段は「三」のマークの鬼瓦。下段左は窓の鉄扉。右は上棟日が記された棟木。





■田中ボタン店。左下はボタンで作られたモビール。涼しげです。

お店には古い箱段や「甲商絹サベリ」という不思議な看板が吊してありました。甲商サベリとは昔の男物の裏地メーカーだそうです。

ん？ 金網店？

その後、一通り天神町を歩きましたが、やはり九時では早すぎたようでもどこも閉まっていました。そこで、もう一度引き返すと、十時になったのでお店もボチボチ開いていました。白濁天満宮の近くに、金網がいっぱい置いてある変わったお店を発見しました。花田金網店です。

金物屋さんなら珍しくないかもしれませんが、ここは金網の専門店です。中には桶枠の底に金網を張った手作りの商品や、宍道湖七珍であるアマサギを挟んで焼く時に使う金網などが置いてありました。かつてはこうした金網製品を注文に応じて作っていたそうです。お店のおばさんに話を聞いてみると、今はお店としての営業はやめてしまっていて、金網はもらいに来た人に分けてあげる程度だそうです。

花田金網店は曾おじいさんの頃からやっていて、百年は営業していたそうです。店内は木造で古くなっていますが、金網が溢れる様子は創業当時から続いているのではないのでしょうか。とても落ち着きがあり、趣がある素敵

り、白濁本町、天神町までやってきました。スティックビルの前に出雲ビルという建物があるのですが、このビルがまた歴史ある古いビルです。ライブハウス、ギャラリーなどが入っていて、最上階のギャラリーが面白いという話を聞いていたので上ってみたのですが、残念ながらこの日は午後からの開店でした。

ここでお昼になり、お腹もすいてきたので、また次回ということになりました。

した。第二回は八月四日に実施、この日はスティックビルのあたりから堅町商店街までを歩きました。朝九時から行動だったので、商店街のお店はまだほとんどが閉まっており、土曜日なので開店するのも不安でした。

ボタン店にびっくり

しかし、天神町商店街の大通りから少しそれた通りに入ると、まだ商品に

布がかぶせてはありましたが、田中ボタン店というお店の戸が開いていました。メンバー全員でオズオズとのぞき、店員の方に事情を説明すると、快く見学を許可してくださいました。中に入ると棚一面にボタンがずらり。大きさも形も様々なボタンが床から天井までを埋め尽くしてありました。こんなにたくさんボタンを見たことがなかったのです、その迫力に圧倒されてしまいました。店内にはボタン店ならではの飾りも見られました。

ボタンには春夏物と秋冬物があり、私たちが訪れた時はちょうど春夏物の時期でした。そのため、店内に展示してあるのは主に春夏物で、秋冬用のボタンはしまっておくそうです。春夏物と秋冬物の違いはボタンの大きさで、春夏物はだいたい二センチまでの大きさとなっており、秋冬用の方が大きいくらいだそうです。

隣の部屋はスーツなどにボタンの取り付けをする場所になっていました。



な店内でした。

街探検の途中で喉が渴き、お腹も減ってきたため、白潟天満宮境内にある、おいしいたこ焼きで評判の駄菓子



屋さんに寄りました。お店の前には昔懐かしいお菓子がたくさん。ココアシガレットからラムネの笛飴などなど、つついっつい幼いころに戻っているのを買ってしまいました。その後、メン

バー全員がたこ焼きとラムネを買いました。編集長はラムネの栓の開け方が分からず、お店のおじさんに教えてもらうという失態を演じておりました。

さすが評判になるほどのたこ焼き。大きさはやや小さいけど八個入りで二百円と安い。熱々で中身がとろけるようでおいしかったです。なんで暑い中、熱いものを食べているのかという疑問も消え去るほどのうまさでした。

その正体は？

天神町と堅町の境目付近にちよつと和風な建物を発見しました。編集長に聞くと、その正体はまだ確認してない模様だったので、私たちが説明しようと建物に近づいてみました。すると、その正体は変電所。ちよつとがっかりしたものの、景観を意識して見ただけでは変電所とはわからない外装になっており、驚きました。

その変電所のそばで、家と家の間にまたがって道路の上に設置された屋根を見つめました。はたから見ると門のようにも見えます。これは何なのか思索していると、つながっている片方の家のおじさんが出てきて、お話を聞か



せてくださいました。

その屋根の由来は江戸時代にまでさかのぼるそうで、当時の松江藩の資金源であった朝鮮人参を取り扱う役所があった場所で、その役所を「人参方」と呼んだそうです。その人参方の通用門が今では市の指定文化財となっております、そのまま残してあります。勝手に改装をすることはできないのだそうです。柱がないことに疑問を感じたので質問してみると、柱は両側の家の中に立っているとのことでした。

今回、観察をしてみようと思ったのは、いつも何気なく通っているお店や通りでもたくさん新しい発見があること。いろいろな人との出会いもあり、とても有意義な時間が過ごせました。

(こざわ・ちかこ／むらかみ・まり／生活科学専攻二年)

商店探訪

野波洋傘店

(松江市豎町)

②

大塚 茂



洋傘店なるもの存在

ほんの十数年前まで、私はこの世に洋傘店なるものが存在することを知らなかった。それまで随分長いこと生きてきて、たくさんのものを見てきたはずなのに、うかつだった。以来、街にどんな専門店が存在するのか大いに気

になりだし、街の歩き方が変わってしまった。「観察」しながら歩くようになったのである。

洋傘店のことはずっと気になっていたものの、なかなか店に立ち寄る機会はやってこなかった。今回、「商店探訪」シリーズで取り上げることに決めて、やっと洋傘店に足を踏み入れ、話をうかがうことができた。何かが肩の荷が下りたような気がする。

羅紗と洋傘

今回おじやましたのは松江市豎町の野波洋傘店。明治十八（一八八五）年の創業だそうで、今年で百二十二年という大変な老舗である。ただ、現在の店舗は戦後に建てられたもので、店舗からそれほど歴史を察知することはできない。

日本に洋傘（こうもり傘）が渡来したのは幕末で、明治になると文明開化の流れに乗って急速に普及していったとされている。創業当時、野波洋傘店は時代の最先端を行っていたわけである。

野波家の主は九代目までは代々半兵衛を名乗っていたそうで、明治十八年



に今の商売を始めたのは八代目半兵衛である。取り扱ったのはラシャ（羅紗）と洋傘だった。ラシャという言葉は今ではほとんど聞かれなくなったが、目の詰まった厚手の毛織物のことである。半兵衛さんはその生地を仕入れて裁断し、縫い屋さんに出してマント、トンビ、コートといった製品に仕立てて売っていた。

ラシャと洋傘というのも変な組み合わせだが、どちらも舶来品で、雨に係しているというのが共通点らしい。仕入先の大阪の間屋もラシャに加えて洋傘を取り扱っていたそうだ。

松江の洋傘店

現在、野波洋傘店を営んでいるのは十一代目の勇さん（八三歳）と妻の春

野波洋傘店



代さん（八〇歳）である。たいてい朝八時三十分頃に店を開け、夕方六時頃に閉める。日曜日は休み。それに、病院通いの日は、その時間だけ店を閉める。

傘が最もよく売れたのは昭和四十年

頃から五十年頃にかけたことだったようだ。まだ家庭に車がそれほど普及していない時代である。歩くことが多ければ傘を使うこともそれだけ多くなるし、傘へのこだわりも強かったのだろう。昔は木次や大東から列車に乗って傘を買いに来るお客さんもいたそうだ。

野波さんの話によると、かつて松江には七軒もの洋傘店があったらしい。「天神さんの前に一軒、朝日町に一軒、……あそこは確か北堀町で、……そうそう東本町にも……」といった具合だ。なかには番傘（竹製の骨に油紙を張った昔ながらの傘）の製造販売から転じた店もあったそう

だ。ただ、洋傘店は横のつながりがありあまりなかったこともあって、七軒という数がいつごろのことなのか、また本当に正確な数字なのかは定かでない。時は流れ、町の規模に比べて多すぎるほどであった松江の洋傘店も、一軒減

り、また一軒減りで、今は野波さんの店だけになってしまった。それぞれの店の詳しい消息は野波さんにもわからない。時々、店に来たお客さんから伝え聞くだけだ。

仕入れは夫婦で大阪に

商品の仕入れは大阪まで出かけて行う。大阪に行くようになったのは昭和四十年頃で、当時は月に一回のペースで出かけた。それまでは松江にやって来る問屋と取引していたが、やはり何軒もの問屋を回って、たくさんの商品を見て、自分の目ですっかり選んで仕入れた方がよいと思いい、大阪まで足を運ぶことにした。大阪には夫婦で出かける。商品を選



ぶのは主に春代さんの役目で、だいたい自分の好みで選んでいく。同じ商品をたくさん仕入れたりはしない。いくら気に入ったものでもせいぜい二本だ。

仕入れた商品を店に陳列するのも春代さんの役目だ。吊すだけではない。折り畳み傘は柄を少し引つ込めた状態で骨を伸ばして少し開くと台の上に立たせることができる。また、骨を少し折り曲げて立たせると、とても洒落た感じになる。

野波さん夫妻は今でも大阪に仕入れに出かけるが、間隔は三カ月おきぐらいに開いた。大阪の洋傘問屋も減って



きて、野波さんが訪ねる問屋さんは今では一軒だけになってしまったという。

お客さんの注文に応えて

お客さんの中には傘へのこだわりの強い人もいる。ものすごく大きな傘が欲しいという人もいれば、ごくごく軽い傘を求める人もいる。折り畳んだとき、できるだけ短くなる傘をという人もいる。

大阪で問屋を回っている際にそんなお客さんの注文を思い出すこともあ



る。「そういうえばあのおじさん、あんな傘が欲しいといっていたな。持って帰ってあげよう」となるわけである。好みが変わっている常連さんを思い浮かべることもあるという。

野波さんは傘の修理もやってきた。骨の修理はもちろんだが、昔は骨だけ持ってきて布地を張り替えて欲しいというお客さんもいたという。しかし、今では傘を修理に出す人はめっきり減ってしまった。

モノが溢れる今の時代、何でも粗末に扱われることが多いが、傘はその代表格であろう。何といっても出かけた

先で雨が止んだりすると、いとも簡単に忘れてしまう。雨が降るたびに大量の傘が遺失物となり、やがて破格の値段で処分されることになる。

お気に入りの傘を買い求め、大事に大事に、修理までして長くつきあうのも悪くないと思うのだが……。

大正時代のチラシ

ところで、野波さんの店を訪れたとき真っ先に見せていただいたのが、松江商工会議所の『しよほう』一九九四年十二月号である。野波洋傘店が取り上げられていたからだが、その記事の中に小さな写真が載っていて、「大

正当時 当店のちらし」と説明されている。野波さん宅に残っているものではなく、記事を書いた人からは松江郷土館(興雲閣)にあったと聞かされたそうだ。

翌日、半信半疑で松江郷土館に電話したところ、「捜してみます」との返事。そして数時間後、現物はないが、写真が残っているとの連絡を受けた。何だかとても大事なものが見つかったような気分で、小躍りしな



■大正時代のものと思われる古いチラシ。なぜか、「郵便物早見」表と郵便マーク入りの帽子をかぶったエンゼル(?)が描かれている。(写真提供：松江郷土館)

がら松江郷土館へと向かった。帰りに早速、このことを野波さんに報告し、写真をお見せしたところ、とても喜んでくださった。松江郷土館ではスキャナで取り込んだデータもいたっていたので、後日プリントしてお届けすることにした。松江郷土館のスタッフのみなさん、ありがとうございました。

(おつか・しげる／食料経済学)



自然をイメージして作りました。不織布の部分で雲を表して、黄色い部分で太陽の光を表しました。4つの柱を組み立てるのが難しく大変でした。

家政科生活科学専攻2年 足立 夕佳

和紙だけの光のよさも感じられるように、なかのセロファンは取り外しができるようにしました。いろんな色が楽しめ、なおかつその色同士が主張しあわないように、セロファンをグラデーション状にしたことが特徴です。

家政科生活科学専攻2年 奥田 緑



ダンボールと和紙でシンプルな和風照明を作りました。色は桜をイメージして、ピンク・緑をメインに使用しました。各面ごとに違ったデザインが楽しめます。

家政科生活科学専攻2年 大國 はるか

光のインテリア

～お部屋の一角をデザイン～

青と黄色の和紙を使って夏をイメージした照明を作りました。枠は全面鍋敷きをくり貫いたもの。底にも側面と同じ鍋敷きを使用したので、底からも光が漏れるようになっています。

家政科生活科学専攻2年 小澤 智香子



くらやみを優しく照らすほのかな光。縁側に腰掛け、花火を楽しむ家族をイメージした照明です。

家政科生活科学専攻2年 難波 美穂

優しい雰囲気にしたかったので、和紙を使った照明にしました。また、ピンクや緑、白などの和紙を重ねて作ったので、個性が出ている照明になっているのではないかと思います。

家政科生活科学専攻2年 深田 徳子



花のようにしたくて作りました。照明が花の形をしていてもいいのではないかと思います。作りしました。材料はダンボールと輪ゴムとマニキュアです。

家政科生活科学専攻2年 夏迫 淳子

編集後記

『のんびり雲』は
島根県立大学短期大学部
総合文化学科が制作・発行する
文化情報誌です

二〇〇七年四月、島根女子短期大学は島根県立大学（浜田）、島根県立看護短期大学（出雲）と統合し、島根県立大学短期大学部（松江キャンパス）となりました。そして、新しい学科、「総合文化学科」が誕生しました。

総合文化学科は「文化資源学系」「英語文化系」「日本語文化系」「生活文化デザイン系」という四つの系で構成されています。世界各地の文化から身近な地元地域の文化まで、長い歴史を有する文化から比較的最近になって生まれた文化まで、大きな文化から小さな文化まで、著名な文化から地味で平凡な文化まで、幅広く学ぶことを目的とした学科です。

『のんびり雲』は、総合文化学科の学生と教員が教育・研究活動の中で得た成果の一部を一冊の雑誌にまとめ、広く地域のみなさんにお届けしようとするものです。企画、取材、原稿執筆から編集、誌面レイアウトに至るまで、（印刷と製本以外は）すべて学生・教員の手づくりです。読みやすく、おもしろく、それでいてちよっと知的な雑誌を目指しました。

昨春秋、創刊準備号を発行いたしました

が、今回、無事に第一号の発行にこぎ着けることができました。これから年一回、秋にお届けする予定です。応援のほど、よろしく願います。

「足立美術館の庭の中なんてめったに歩けない」と、楽しみにして行った取材。開館中だったから、もちろんお客さんがたくさんいる。庭の中に入り、松の手入れを見せていただいた場所は美術館に入つてすぐの窓の外。窓の向こうで、こちら側にカメラを向けて記念写真を撮る人や、庭を眺める人達の視線に、「動物園の動物ってこんな気分だあか？」などと、一緒に取材に行った友達と笑った。

取材を終えてから、記事を完成させるまでに一苦労。……どころか、いくつも苦労があったような気がする。せっかく書いた原稿データが消えたのもショックだった。初めて使った雑誌編集ソフトにもいろいろと苦労をさせられた。苦労して探した機能が、実はとても簡単などころにあつたり、いきなり画像が表示されなくなつたり……。まあ、全部終わってしまったら「あゝ。そんなこともあつたけど、まあ面白かったからいいんじゃない？」と思えるのは、苦労よりも、やっぱり面白さや楽しさの方が大きかったからだろう。（愛花）

イメージ調査に限らず、アンケート調査というものはとても骨の折れる作業だ。アンケートの作成から配布、回収、集計まですべてやらなければならぬ。もちろんそんなことをするのは初めて

であり、質問ひとつ考えるのも「一体何を聞けばいいんだ？」という感じ。配布に關しても、恥を捨てて授業前に大声で協力を依頼した。

質問が曖昧でどう答えたらいいのか分からない、しかもすぐに回収する。答える側としてはそんな無茶な……と思ったことだろう。しかし、アンケートは最終的に八十二枚も集まり、たくさんのお返事を得ることができた。丁寧に分かりやすく答えてくれた学生も多く、記事を書く上でとても参考になった。アンケートに協力してくれた県外出身学生の皆さんには、誌面を借りてお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。（南央美）

山道を迷いに迷つてようやく泰中さんのお家に到着したのは、一時間間約束の時間を過ぎてからのことだった。泰中さんに怒られてしまうのではないかと、車の中で私たちはひやひやしていた。けれども、そんな心配は無用なことで、怒るどころか、「待つとつたよ」と快く歓迎してくださった。

帰る時には、「また絶対に来なさいね、絶対よ」と言つて私たちを見送つてくださった。私は気持ちが暖かくなつていくのがわかった。こんな会に行きたいと切に思いつながら、車に揺られて帰つていった。そのような中で、ど

うしてほんの数時間前に突然来て帰つて行く私たちに、そんな優しい声をかけてくださるのだろうか、ふと考えてしまう。そして、聞き漏らしたことがあつて電話をしたときのことである。電話を切る間際に「絶対に来なさいよ」と言う言葉をかけていただいた。それに、「質問があつたらいつでも電話してきなさい。遠慮はいらんけんね」と言つてくださる電話の声を聞きながら、本当に出会えてよかったと思つた。（麻衣）

ご意見、ご感想、情報をお寄せください

第一号の内容はいかがでしたでしょうか。ご意見、ご感想をお寄せください。また、こんなテーマはどうか、こんな人、こんなものを取り上げたらどうか、など、次号への提案や情報提供も大歓迎です。お便りをお待ちしております。

のんびり雲 第1号

2007年10月20日発行
編集 「のんびり雲」編集部
（責任者：大塚 茂）
発行 島根県立大学短期大学部
松江キャンパス
総合文化学科
〒690-0044
島根県松江市浜乃木7丁目24-2
TEL. 0852-26-5525（代表）
FAX. 0852-21-8150
印刷 今井印刷株式会社
挿絵 奥野明実 瀬古喜代栄
小室喜美子
制作協力 小倉佳代子